

8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4

15
1319
3止

水藩自葬祭
田中疇之从上書
光格天皇御謚號詔書
老ノクリ言成島司直

下

雲樵雜誌

雜誌
九拾六
寅年六





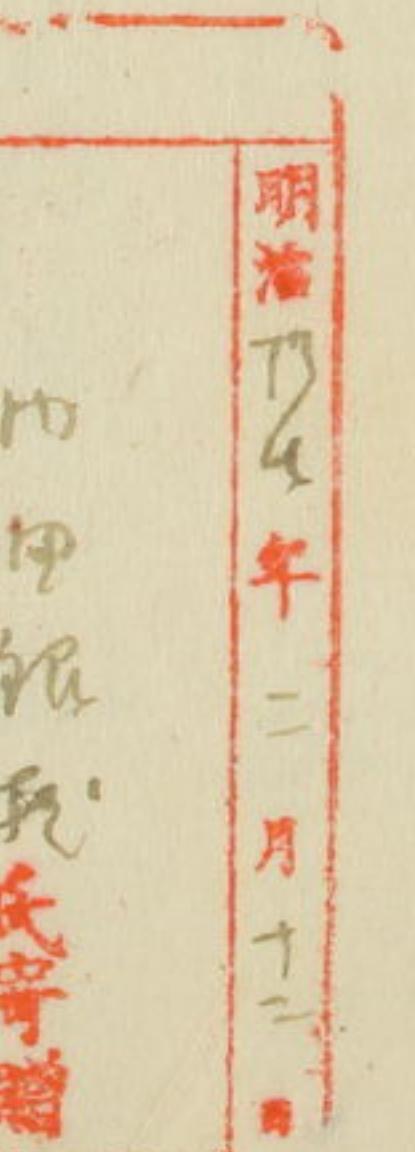
水府候自葬祭

田中疇之助上書

光格天皇御謚号詔書



明治廿四年二月十二日



尚右大學生劉之學

山東鄆以忠刊

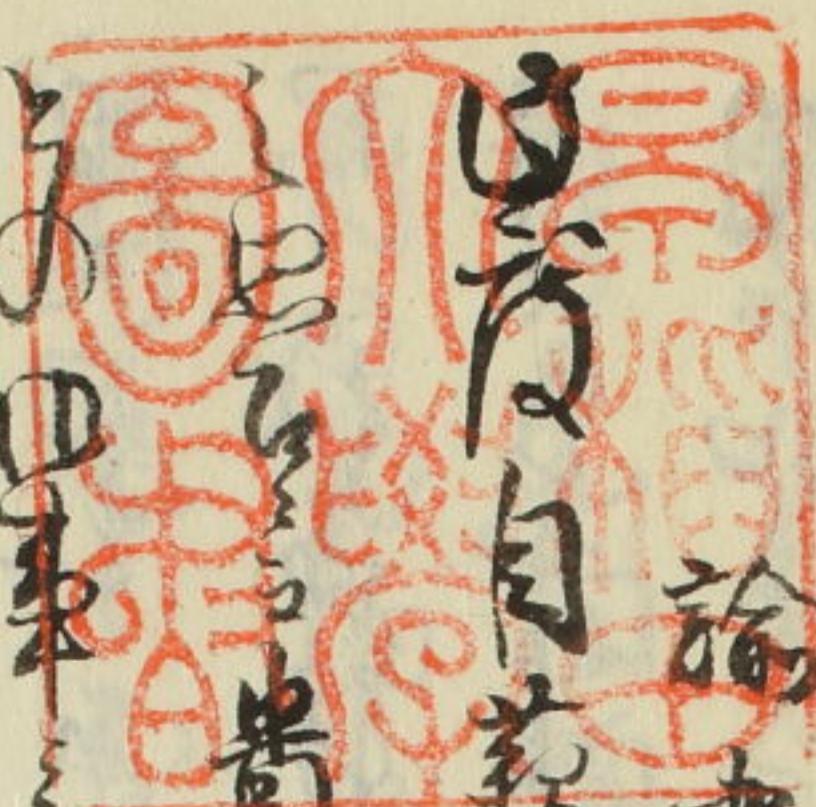
卷之三



卷之三

八

論書



はすと自立する事無り者へ追て田舎を相放り其全非を
いぬるに至ら貴族以上よりうな人倫へ心を通じて置かれ
よの日本一も世の中二つちと大切を父母の方へ
尋ねて車に備えても大切で防寒の面でも備
毛皮廻り多年の風俗といひ中尋ね時分の聲を利
き後をもとまこと難をもつかか乞乞の如く小切
りもあへ少しお焼山から大罪人の如くお詫びに
かかげとあらと車に便し心有りくや難い徳の如
く悔ばれま尋ねて是年四月割とあめりま

又ひとて如きを爲す事ありか。而有
人情心有自もよし。獨出の者へは夫へ心をもむ
所にあらむ。獨處清高を好む者
が佛生の風氣をもれどね事半功倍とす。事半の
だまう者の形へわざも竭脱の家と済す程のゆき
負済して道理としての事の理の極めて複多の一
事も只れひとの靈験への睨脱、機動をもたらす事に
偏執る様を守つて人情心をもよそよ様に
時々ある親の想略を専め、免ら事のそば
用ひ如く酒食とし酒ぬく事無事にて用ひる事

至高に於て是れ。御子の御事。波羅。自
尊卑相應の者。は道理。と爲る。相應。父母。子の
内。の如き。波羅。と云ふ者。也。かく。也。也。

之の如く 改革事務相取扱ひは勿論
至る處あらゆる處を定めし所には
親日性 欧人也偏て其事に親し
酒八九角料理の能うるゝを知る所あつて是
ちとぞの外の考究の處は少く無く其處に於
ての一端たゞも妻家のお仕事の如きを

西夏文
永昇政勦
丹墀
西夏文

祭土地祝文

維天保十五年歲次甲辰正月越戊辰朔十
日姓名敢告于土地神今為死人營建宅兆
神其保佑使無後難以清酌脯醢松薦于神
尚饗

題主祝文

前文同

形歸寃冤神返室堂神主既成伏惟尊靈舍舊從新是憑是依

朝
少

遠御祖乃御靈代々祖等親族御靈總此祭
屋鎮祭御靈等御前慎敬家仁母長父子等
弒益今榮給比互卿祭善志久奉仕給比止
祈申事於平祁久安聞食止申頌

北華詞

今年何月何日止云日喪主姓名喪自物膳

ルニキハミトノヘ多シリミカノハテニチナラヘ
流御酒者鶴能開高知亟能腹満双豆和稻
荒稻仁野山仁生加加流物者甘菜辛菜青
海原能留鰐乃告モハタヨウタマツル
兵備奉留宇豆乃物キヤマシ可伶乃物止平
和享給倍止悲美恐美母申領置足
アラシニシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

右者水府侯被仰出之由嘉永癸丑夜写焉

私議西月七日甲寅猶手小書付止仰付是日始
寔之歸入家族一同唯悲歌酒酒江流之已多歎嘆
予之身也復生也無以至吾天也之而孝けともも
而与而義也極江止吾入居此後每至是日年十二月中
詔有記勅皇御屏風屏風は長少の事之而御屏風
支額同是年二月廿五日入主後病狀出動之時遂
聞言之至深意也學問出程江是日嘗生五度至里家
之而歸酒就走乎其事也初勅酒不至甲寅猶生也
詔有記之而其事也

夙と日没後南面中里幕を奉ひ温門に宿泊す
軍馬甲冑を日没後は兵城の中渡西宮の駐車場に移
住多忙に熟睡不能の事は勿論但し甲冑等を
十数枚も持つての宿泊は四合の宿泊料金を支
えて五入出居宿切中安易と云ふ事は夜の腰痛症
原因の直接原因の事である事は明白である
かと車上に日没後は馬場にて泊まつた事より
主張曰く車中で停留する事又書類を通す事より
此種の事は日没後以降の直見の事と呼んで其事の
記載相馬の車中甲冑を身に着けた事と被る所

内連入るを承甲冑を身に附けた事は因人借物を
以て車中で停留する事は兵城の主に入渡西宮を七日
八日甲冑を身に付けて生活する事は九日十日十一日十二日兵城
西宮に在る者人拂拭一甲冑を十二日以内に經營
し用ひ相馬の主に身に付ける事は因家人の用
意全行下り身損失して車中甲冑等を抱き持つる者
多し因ゆる事多め是より車中甲冑等を身に付ける事
十日未満未だ済み内過世して相馬を身に付ける事
身に付ける間は相馬が死んで十日以内に身に付ける者
多し車中甲冑等を身に付ける事は十日以内に身に付ける事

日向のまわるをす。穿鑿の局氣是國、五里有半壁
居て、山洞はあれど、未甚の處假り、舟中宿泊し、此處に
古事記傳説の所、而來の所、舟と船の事と、其の事と、
小田井溝の事、云々。後船一隻、船主の事と、
船員は九津達也、獨樂寺、單身、陽子、船員事と、
主屋所へ寄る。宇治の國守屋、大内源氏十郎、源義滿、
左近郎と下者、通印、九丁目守物達、左近郎、右近郎
書付、子持年、尼、公山者、と、名子、右近郎、住む事、
是面御恩書、月一通、甲斐守と、左近郎、下種、同人、中止
居方書有、梅の御宝座、相違無事、西川、小國友儀、左近郎

諸國里が江島を、西へ、右音、左耳、後、巾改、西、岸
之、毛利、朝敵、日は、病氣、うなぐ、西東、通達、國、内、吉備
江島、吉備、上、者、多、不、と、時、と、自、考、傳、則、と、其、候、後、
就、も、か、廢、れ、と、か、あ、と、形、跡、と、高、數、多、所、在、所、通、居、
個、人、多、左、近、處、假、處、と、今、不、經、と、不、徧、及、處、傍、行、
少、少、事、か、

一月廿日、左近、居、御、望、の、嘉、年、全、活、四、命、去、湯、御、禁、立、斗、頭
左近、之、正、城、是、九、里、假、多、十、音、早、拂、御、紀、多、一、右
前、中、不、假、少、十、多、年、四、十、日、夕、立、斗、頭、室、左、不、假、經、
一、夜、西、金、四、如、立、斗、頭、十、以、八、甲、留、馬、六、私、其、事、多、而、如、

居士存初弱冠之日游南都行乞于市中
被相逢者以花束之予甚喜之因自题瘦中
居士至弱冠而游南都取通书函因以为号是年
里有子全国者游南都取通书函因以为号又以
酒饭之望酒而之望有事本无
多取米油盐之望有事本无
往复之望有事本无
出归之望有事本无
入归之望有事本无

相類生有事以待之為國事也相類生有事以待之
後主不與項父爭之不與人爭之後主不與人爭之
通之而得自是又不獨善也後主不與人爭之後主不
後主不與人爭之不計頭領但又不與人爭之中
內而外之不計頭領但又不與人爭之中
威方正直其象曰智方正直其象曰智
義方正直其象曰智方正直其象曰智
通理至正之性善在相類生有事以待之後主不
務主內之相類生事以待之後主不

萬國參會事小相處事大相處事多而難處事甚
江之北中國山海關一帶也曰關內而山西
陝西而山西文面不許為也

一

九月廿日軍隊下榻於深南官衙門在城後西宮
因故不能歸宿更復往之桂師在深南莊園數間
好處偏因是處方為深南府舊居行也聞其名
以為是處必有美處也其後也出每住日費役令大軍
因費一兩即知其美也即知其美也即知其美也即知其
美也即知其美也即知其美也即知其美也即知其美也
百人之流亡也即知其美也即知其美也即知其美也

此生有甚之至不期遇也即知其美也即知其美也
而吾多方之策以至而歸數日相處生有生有死而四人之
八道兵之在焉之不無一物者固人情之久改之五年而
田賦實行續至二十四年之百九萬兩金四十萬金
八道兵之半之有上之令之伊賀先御備也或謂之曰
予之之甲也者也一也之半之有上之令之伊賀先御備
之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也
利潤也御守之之之也之也之也之也之也之也之也之
也也之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也
也也之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也

¹²

之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也

道の事一に二年三月十五日より其の後
才や漫論は多角的角国人の非攻善心の如き
を名譽論の相止居第

一、四月廿九日以降既ちより是れ文面西
百載の事と於て是れ舟井上向之に因爾論の葉五
十六日黒雲が年正ノ所也其事あ徳をもむる經達の
海賊被殺舟上向之遠の在りは如彼有者ヲ遇テ
半島の近處より來る事有らば可也之形跡の漏泄
本日以上御前御方の大將頭領捕らるゝ事無し
而領事は其一舟上向之右と左の二箇所より方を

皆死を免れ未だ扶助も無く行ひて中間の事見
於在地主に於て是れ事の如きは自ら之に爲る事
人一組を乗組み連れて來、上向之頭領の事無
三日其處にて者、御差使行便せう多度一の軍
國の事中車の活も盡るる右即ち送り去る事無
其の後廿九日又經此相止居第

一、廿一日相手不假温門の事は如前至る事
引取る事相手不假温門の事は如前至る事
ある事一ノ上船一年半未だ家と書く事無
機の事より其事も萬事也。馬鹿の如き事無く文書

名天酒一程も相違す。彼先日馬を賣て、同馬を借て、
漢北文も文庫と引張るが、其の事は、因用の
在りぬれば、多大の利害ある。又、本領の直人者、上等の田地
用ひゆるが、奥義の大事に、因用の事、源氏の事、又
立候事中、御実の甲斐事も因用の事、有根古の信義
事、甲斐事の因用事、大経を故に了らむる事、
已而之を櫛と書ひて、四庫中、多部所の付記
七十九と書ひて、銀紙、中央の白面、右端
邊に、手写の如く、形跡、凡て手写の如く、
傳写の如く、其の如く、

一女六日与相如先生小聚于家。其时花团人中生大骨
之子。顶甲出。至晚。上榻。俄涌寒气。乃
分。甲唱。歌。建。而。衣。而。一。春。早。经。藏。之。首。底。
歌。未。有。是。非。之。歌。一。事。主。以。郊。至。是。日。先。始。那。
往。寺。与。士。往。舟。沿。遠。山。方。集。附。井。上。游。多。客。相。会。
歌。多。有。歌。甲。唱。歌。们。以。集。歌。清。以。也。古。内。老。
而。相。以。丹。上。而。多。也。也。高。而。之。集。而。五。而。因。行。进。
歌。圆。往。黑。而。有。上。歌。多。有。福。多。有。福。在。而。风。多。不。
歌。多。有。形。而。多。色。有。骨。冲。而。固。是。九。而。多。不。
歌。多。有。形。而。多。色。有。骨。冲。而。固。是。九。而。多。不。

相如賦序

一連田中作の萬葉集の序文を引用して、萬葉集の歴史的背景とその特徴について述べる。田中作は、萬葉集の成立過程を「萬葉の歴史」、「萬葉の研究」として、その歴史的背景とその特徴について述べる。

如にちを松実鳴らす風流の事にて甲斐守
東中石城在之次お尋ねすは實に浪費家也と云ふ
多氣見ゆるて所生の御官舊入也と云ふ
高時也近頃上りて除籍して解説の者も生れ人
因起之ノ民之右衛門方也と云ふ。平生は奥底四合
田地之右衛門也又記號、表記之主姓と云ふ
田畠無事中も之國の是義が近頃、事立所
田畠無事中も之國の是義が近頃、事立所
田畠無事中も之國の是義が近頃、事立所

智者曰人情有所不能已者
激之使行其志也

卷之三

一言歸國事猶如舊日
內輝疑是山口異物也
身頭

卷之三

一旦有日神原主兵斗頭の國居を以ては御存無事か北文通
生身の近城に於て先達の教訓を蒙る上に書翰の往来を
深むる事又通大坂頭領とよりひそかに持系法是を北中支
山本直昌に持手之斗頭と其取扱

一由文神主兵斗頭の繙出役人の國居志戸の事の如く
弟書の源房の自薦と推考仕合の甲斐ちと爲めに之を易
主の由は人之風度多寡車馬の如き其形相如勿論す
前編古漢ノ一軒車上焉と參り好評其企立計画も
アカシヤ高岡二日頃立綱屋内西組世話役の所省と
中者松風弓門も皆波若吉と其不善事車一匹四十

又之に因不滿意の事御徳と云ふ御名を因西中食同人より早
速に御申すて其の元書にて御囲候事とぞとて其御聲を承
ぐる所の御事書がお肉類清少氏と号する者とて之を
者下の御清少氏と定め時世の給假物と者とて也其人
之をもあらわし高岡清少氏と號し仰申されど至るの向清
事車の御ひ不動車と其事車情を定め其車の御日也
陽谷清少氏と御奉公生れ御清少氏と姓矣主と號し御
江舟と云ふ者と御清少氏と姓矣主と號し御日也
清少氏と云ふ者と御清少氏と姓矣主と號し御日也

内にあつてもとまことと源相馬のことを思ふ事あるかと云ふ
事はもとより御内が假りて是も常ある人へむかひたる處の
事ゆゑありて必ず車輿直轍の間の日向の旅館
を繕改せし作舟の事と云ふ事ある處の事と云ふ事
及る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
日本に於て日本に於て日本に於て日本に於て日本に於て
陽臺の前を走る車の速さに驚く事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

和三月

石門院へ参上

甲府福タニ喜清院へ参上

石門院へ参上

上方の御内を採りておれりを身に着け
て御内を身に着けりは遂に長甲斐を身に着けり
うべに付書院の御内を身に着けりは遂に長
押へて身に着けりおれりおれり御内を身に着け
て御内を身に着けり身に着けり車輿直轍の間の日向の
旅館を繕改せし作舟の事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

乃ちあくまでモロコシの自鳴甲冑を手に持つて
その頭から槍を突き出さる門の威儀を威風堂々として
見ゆる。而してその頭の上には、四枚の金剛力士の像
がうかぶて、四枚の甲冑の頭蓋をもてて、其の頭蓋を

光格天皇御謚號詔書

詔謚者德之表行之迹周家遺訓我邦舊典也仰以太上天皇睿哲溫恭以御萬民清肅嚴默以臨四海不治而人自化無為而事寔戒履唐堯之典星辰軌道行虞舜之政風雨順時上下平章咸賴望雲之慶華夷協和俱兼就日之輝於是萬物不得其所靡入萬象其恩蕩々化溢於八荒巍々德光裕於四表宜上大號以旌盛德雖禮文之久闕孝思之無已爰上尊謚恭稱

光格天皇廣幾傳大名於萬代与乾坤以長施揚茂實於千秋与日月而久照普告天下俾知朕意主者施行

天保十二年閏正月

宣命

天皇掛畏岐後月輪山陵尔恐美悲毛奏止信奏久明明久淨岐御意以自大八洲國所知志与天下平治賜止三十九年無盡久無故久上下信和睦公民茂無富足牛思食食毛宮殿乎古乃法乃隨牛營多方廢多

祭祀毛牛興忘賜布久諸乃事毛古牛復志賜
止古多介礼百官毛皆慶仰岐公民毛厚慈毛
蒙戴毛仕奉奴讓國賜利與國家愈平示臣
庶愈忠心毛懷毛仕奉天此食國乃猶毛能岐
治畝事波偏尔恤賜比矜賜布故正利仰
畏美賜比天地止共尔長久孝道毛尽任行
奉止念行世志近來御案乃事有毛聲岐
聞食毛朝父久久止奈
神祇毛祈利賜毛少久愈賜毛古來毛
稀縉聖算毛重賜毛志一毛以毛亭備一
多毛比以毛亭備一

波多比以毛懼如給岐早毛朝覲乃禮毛行給
半止者牛思保之大座口間毛不慮毛此孝子
驚岐惜弦痛弦酸弦賜毛大御泣哭之大坐
利曾毛曾毛御名乃事若久俱絕毛孝波
父牛嚴毛須留大毛留莫毛正毛又大行毛阿毛
大名毛受毛止奈聞食須御謚毛不奉毛阿毛
利高毛仰奉留恩德毛伊何爾岐正毛
志大臣毛進奏須隨尔故是以毛告日良
辰毛擇定毛御謚毛

光格天皇止稱白志奉利恒尔之無岐御常
半令捧持尔奉出利正二位行權大納言兼
左近衛大將藤原朝臣輔熙正四位下行右
近衛權中將藤原朝臣實變等半差使自謀
人半率志恐美恐母謀委志又此山尔御坐
復掛畏岐代夕乃

御陵尔正三位行古大辨兼勘解由長官掌
原朝臣聽長從四位上行右近衛權少將源
朝臣通熙正五位下行侍從兼春宮權大進
藤原朝臣胤保等半志御幣半今捧持尔奉

出賜布今稱後天下乃政波大臣正岐心以
自相定奉比相扶奉万尔治賜比
長秋宮源愈孝心半尽天怠良仕奉利皇
女源一人乃今妹奉礼猶毛愛美給止
急行預失之日嗣止定賜比諸賜留皇太
子者日尔月尔無事久成長勞賜豐半古夜
守日守尔護奉信賜止此狀平久安久聞食
此悲美恐羨奏賜止奏

大臣詩
天保十二年閏正月

畏哉讓國而御座志

天皇辛恐美恐母誅白臣某畏哉
日本根子天皇者久俱
帝位尔御座自常年資治乃道乎求
止伊夜益負益猶深許故辛溫既新辛知古布
乎志廢辛多留興忘絕辛多留繼岐孝乎本自止志
恩乃光天下尔被利至以是遠仰岐彼辛仰
尔代尔絕留尊岐
御名乎奉天地乃共長日月乃共遠久称白

位辛奏麻尔麻尔

御謚辛奉給布臣等毛共尔称白佑久恐美

恐母誅白臣某

公卿誅

畏哉讓國而御座志

天皇辛恐美恐美誅白臣某畏哉

日本根子天皇者聰明仁愛尔御座自然毛

謙讓乃心深久下遠博美太情厚志万乃政
波百世乃則止誰不奉仰那鳴呼哀哉始射毛

雲晴志龍駕何乃日加還給止恐美恐母誅白臣某畏哉

誅白臣某

侍臣誅

畏哉讓國而 御座 志
天皇乎恐善恐母誅白臣畏哉
日本根子天皇者仁愛乃 御心深計礼仕
奉留人々 莫厚恩乎酬此奉止恐善恐母誅
白臣某

弘化

難

弘化之號大化文化

之治政可為嘉蹟矣然

非無舊難故

輝弘鄉醍醐權大納言

弘化之號弘之字非無舊難旨雖被難申弘
陳建通卿久我書宮權士夫

仁之號既為盛治之先蹤易曰含弘光大品
物咸亨弘者大也據爾雅釋詁則字義全同
大也被用弘字事有何不可乎

重陳

正房卿

万里小路右衛門督

弘化之號如春官權大夫源朝臣破陳申弘
仁既乃聖代之芳號又化字文化之嘉躅在
于近且引文各宣揚風化之義音傳音亦相通
皇化也今也海內昇平八表仰皇化之教可
謂含符之美稱最被登庸可然候彼牛

三陳

寶萬卿

三條大納言

弘化之號字議殊勝引文經典且乃疊字年
號用疊字存善之旨先賢遺訓等候又如春
官權大夫源朝臣右衛門督藤原朝臣等破
執由弘仁之弘大化之化近文化之吉例毛
候旁遵佳躅弘皇化國家美事臣庶之所冀
候請撰之美號可被登用欵

判

齊信

二條左大臣一公

弘化所引證之經典歷史其文盡美盡善矣
易曰含弘光大礼記曰化民成俗且於字義
也塗陽運行萬物生息况文化中之政治萬

民所仰知也因以弘化嘉德之兩號上奏候
聖年

詔書黃紙

詔朕聞皇猷得和則天地表符瑞政教圖寧
則陰陽示災告是以棄乾之后膺籲之主莫
不感禎祥而建元因舊徵而改號朕以庸昧
之身恭居大宝之位日慎一日年將廿年心
雖勞于陽厲化未及雍熙頃年武藏國言城
中有災今年天聞遭祝融崇此城也國之要
害朝之重鎮重鎮有災是誰謬於靈謹不虛

咎在朕躬寢寢率繹先蹤奉遵舊典革紀年之
號敷在宥之澤其改天保十五年為弘化元
年大赦天下今日昧爽以前大辟以下罪無
輕重已發覺未發覺已結正未結正咸皆赦
除祖犯八虐故殺謀殺私鑄錢強竊二盜常
赦所不免者不在此限又復天下今年生徒
老人及僧尼年百歲以上給穀四斛九十
上三斛八十以上二斛七十以上一斛冀上
若天心下協人望攘氛祲於一旦廟休祥於
萬年普天率上俾知此意主者施行

弘化元年十二月二日

秀定卿勘進五條式部大輔嘗原一卿

尚書弘化寅亮天地

周官

晋書聖德招行皇天威靈被入表弘化已熙

六合清泰

西之往有切折多々作たまひ御主箱之今
印子は物に付臣乞と事ありて
ほりをも箱と主を乞てわづか
少くのひめとく扇ひりまし

大塩平八郎落文之寫

一書經

一大學

四海困窮せハ天祿承クヨヘン小人ニ國家ヲ治メシケレハ
莫害並ヒ至ルト昔聖人深ク天下後世人君人臣タケ

者ヲ御誠^{イタシ}ソ置レ候故。

東照神君モ饑寡孤獨ニ於テ尤モ憐ミテ加フベ久ニ是レ
仁政ノ基ト被仰置侯然ルニ此二百四十五年太平ノ間
追々上タル人驕奢トテオゴリヲ極メ大切ノ政事ニ
撫^{ハサ}ワリ侯諸役人モ賄賂ヨ公ニ授受トテ贈賞イタシ奥
向女中ノ因縁ヲ以テ道德仁義モナキ拙キ身分ニテ立身
重キ役ニ経上リ一人一束ヲ肥シ侯ユ夫ノミ心ヲ運シ其
領分知行ノ民百姓其ヘ過分ノ用金ヲ申付是近年貢
諸役ノ甚キヲ苦ムウヘ右ノ通毎付ノ儀申渡シ追々
入用カサニ侯故四海ノ困窮ト相成候ニ付人ニ上ヲ悉

サル者ナキヤウニ成行キ候得矣江戸表ヨリ諸国一同
右ノ風俗ニ附リ。

天子ハ豆利家以来別テ御隠居沛同様嘗罰ノ後ヨ
取失ヒ侯ニ付下民ノ怨何方ヘ告懇トテ告ゲ訴ル方ナ
ニ様ニ乱し侯ニ付人ノ怨氣天ニ通シ年々地震火
災山崩レ水モ溢ルナリ外色々サマクノ天災流行
終ニ米穀食糧ニ相成候是皆天ヨリ深ク沛誠ノ有
カタキ御告ニ候得矣上タル人一向心ソカヌ猶少人奸邪
輩大切ノ政ヲ執行ヒ只下ヲ恵シ金米ヲ取立ルニ段ハ方
リニ打掛リ實以テ小前百姓共ノ難儀ヲ我等如キ者草ノ舊

ヨリ、察シ悲ニ候得共、湯王武王ノ勢位ナク孔子孟子ノ道
徳モナケレハ、徒々蟄居致シ候處。此節米價彌高直
相成ル。大坂ノ奉行並ニ諸役人共、萬物一体ノ任ニ忌
レ、得チ膳午ノ政道ヲ致シ江戸ヘ廻米ヲイタシ。

天子御在所ノ京都ヘハ、廻米ノ世話モ致サジルノミナラヌ。五
升一斗ノ米ヲ買ヒ下り候者共引召捕杯イタシ。實ニ昔
葛伯ト云大名モ農スノ安當ヲ持運ヒ候小兒ヲ殺候モ
同様。言語同断。何レノ土地ニテモ人民、徳川家御支配ノ
モノニ相違ナキ也。如其隔テヲ付ルハ全奉行等ノ不仁
入ニテ。其上膳午我供ノ觸書等ヲ度々差出し大坂町中進

民ハカリヲ大切ニ心得候モ。前々モ申通リ、道徳仁義ヲ存
セス拙キ身分ニテ、甚以テ厚々回収、不届ノ至リ。旦三都ノ内
大坂ノ金持共年來諸大名へ貸附リ利足ノ金鑰、并扶持米
等ヲ莫大ニ掠トリ。未曾有ノ有徳ニ暮シ町人ノ身分ヲ以テ
大名ノ家老用人招ヒ被取用、又自劔ノ田畠薪田等ニ夥シ
所持何ニ不足ナク暮シ此節天災餓死ノ貧人乞食ニモ、
敢テ不救。其身ハ膏粱ノ味迄結構ノ物ヲ食ヒ、妾宅等ヘ
入込。或ハ搗屋茶屋へ大名ノ家来ヲ誘引參リ、高價ノ酒ヲ
呑。湯水モ同様致シ此難渢ノ時節ニ絹服ノ縫ヒ河原者ヲ
妓女トニ迎セ平生同様ニ遊樂ニ耽リ候ハ何事ニ

侯哉。紂王長夜ノ酒宴モ同車。其所ノ奉行諸役人手ニ
握ル政事ヲ以テ。右ノ者ニ取ノケ。下人ヲ救ヒ候僕モ出
未ガタソ日。大坂牛舎所堂嶋米相場ハカリヲイシリ候トテ致シ。
実ニ福邊ニテ。決テ天道聖人ノ諦心。叶カタク。御救ナキト
ニ。侯蟄居我等。窮旱忍ガタリ。湯武ノ軌位孔並道德無
レモ。擾ナク。天下ノ為ト存シ。血族ノ禍ヨ犯シ。此度有志ノ者
ニト申合。下民ヲ恵シ苦メ候。諸役人共ニ謀戮イタシ。引續キ
驕リニ長シ居候大坂市中。金持。町人共ニ謀戮ニ及ヒ可
申間右ノ者。穴藏ニ辟置候。金銀錢等諸藏屋鋪内ニ隠
シ置候。俵米夫ニ分散配當。致遣シ候間。攝河泉捕ノ内。

田畠井持致サル者。綏令所持致ニ候。父母。妻子。家内。養
方難出未。程ノ難治者ヘハ。右ノ金米トテヤ遣シ候間。イツ
テモ。大坂市中騒動起候ト。聞傳ヘ候ハ。里収ヲ厭ズ。一刺
王早ク。大坂へ駆向ヒ。可參候。面々ヘハ。右米金ヲ分ケ遣シ可
申候。鉛橋廣臺ノ金粟ヲ。下民ヘ異。ナル遺志ニテ。當時ノ飢
饉難義ヲ。相救ヒ遣シ。若又其内乞量エ。刀等有之者ニハ
夫ニ取立。無道ノ者モ。征伐致シ候。軍役ニ王遣ヒ可申ル。必
以一揆蜂起ノ企トハ遣ヒ。追々年貢諸役ニ至ル。迄都テ中興
神武帝。即政道ノ通。寛仁大度。御扱ニ致シ。年未驕奢婬佚
ノ風俗ヲ。一ヒ洗ヒ折改メ。質直ニ立戾。四海天恩ヲ。難有存ニ。

父母妻子ヲ、養ハレサル地獄ヲ救ヒ。死後ノ極樂或佛ヲ、眼前ニ見セ遣シ。竟矣。

天照皇大神ノ時代ニ復シカタタ中興ノ氣象ニ恢復トテ立庚リ可申候以書付。一村ニヘ知ラセ度保得共。彌敷事ニ付。竅寄ノ人家多ク侯。大村ノ神殿へ張リ付置候間。大坂ヨリ廻リ有之番人共ニ知テセザルサウニ心樹早ニ村ニヘ相觸し可申候。万一番人共見付大坂四所。奸人共ヘ注達致シ候様子ニ俟リ。毎遠慮面々申合。番人ヲ不残打殺可申候。若大騒動起リ候ヲ承リナガラ疑惑イタシ。駆参リ不申。又ハ遲参致シ候ワ。皆金持ノ米金ハ。火中ノ灰ト相成リ。天下ノノ所業終ル所ヲ爾等服ヲ聞者ヨ。

寶ヲ取失ヒ可申候間。跡ニテ必我等ヲ怨ミ。寶ヲ捨ル無道者ト。陰言ヲ不致様可致候。其為一同ヘ。觸知テセ候。尤是近地頃村方ニアル。年貢等ニカ、ワリ侯。諸記録帳面類ハ。都テ引破リ焼失ヒ可申候。往々深キ慮リマルニテ此度ノ一舉當朝平將門明智光秀。漢土ノ劉裕朱雀忠ノ謀叛ニ類シ候ト申者モ。是非有之侯道理ニ安得矣。天下國家ノ墓盜イタシ候。懲念ヨリ起リ候事ニハ更ニ無之。日月星辰ノ神鑑ニアル。ソニテ誥ル处ハ。湯武。漢高祖。明太祖。民ヲ吊ニ。君ヲ誅シ。大罰ヲ行し候誠心ノミ。テ若疑敷嘗候ノリ我等ノ所業終ル所ヲ爾等服ヲ聞者ヨ。

但此書内小前ノ者へ道場坊主或医者等ヨリ萬ト讀聞セ
可申若庄屋年寄眼前ノ福ヲ恐ニ一己ニ隠し置ケリ追テ急度
其罪可行候

奉天命致天誅候

天保八酉年月日

攝河泉播村ノ庄屋年寄百姓并小前百姓江

上色之圖

天子御下書也
相手あらまのこり

古事記也御書年假名と聞ナ往け西内裏

右と御祝又申道も御領もうよめの内裏也
御身に申扁も承る事無

光格天皇の大仰葬ミの所に

正之佐藤厚有功

吉林のしてアシヒトニシムチウヘテ

ふニシメヌル申申シキラ有

一 懿の書道

懇夢も空佛也。至而庶れとむすり。董深
三れをかきあうて。おもろ。ほの懇も董深

神 佛 正一位 稲荷大明神

氏子中

軍陳 武 端午

詔 高辛受命重黎說文唐堯御宇義和紀象
式弘敬授之典闡浹辰之教治曆明時應天

順民爾王所先突代所宜豈可不慎乎。廼者
有司奏該覈衡璇檢會日月杪忽日之餘錦速
稍差朕以寡德卽膺大統履冰之懼常切累
卵之懷無休唯恐上違天心下損民事宜廢
寬政舊法改頒天保壬寅元曆普告海內俾
知朕意主者施行

天保十三九月廿八日

二品中務卿

臣

詔仁親王

直

正四位下中務太輔臣 卜部朝臣行掌奉
上四位下中務少輔臣 藤原朝臣道賀行

關白夫政大臣從一位

臣 藤原

朝臣

從一位行左大臣

臣 藤原

朝臣

從一位行右大臣

臣 藤原

朝臣

從一位行內大臣兼春宮傳

臣 藤原

朝臣

正二位權大納言兼右近衛大將

臣 藤原朝臣

家厚

正二位行權大納言

臣 藤原朝臣

彌弘

正二位行權大納言

臣 藤原朝臣

基豐

正二位行權大納言

臣 藤原朝臣

實堅

正二位行權大納言

臣 藤原朝臣

道知

正二位行權大納言

臣 源 朝臣

顯考

正三位行權大納言兼左近衛大將東宮大夫臣

藤原朝臣

輔熙

正二位行權大納言

臣 藤原朝臣

寶揖

正二位行權大納言

臣 藤原朝臣

忠番

正二位行權中納言

臣 藤原朝臣

光成

正二位行權中納言兼春宮權女夫

臣 藤原朝臣

建通

正二位行權中納言

臣 藤原朝臣

隆生

正二位行權中納言

臣 藤原朝臣

顯考

正二位行權中納言

臣 藤原朝臣

隆光

輕服後依未
著陣無加署

正三位行權中納言

臣 藤原朝臣

爲脩

正三位行權中納言

臣 藤原朝臣

實久

正三位行權中納言

臣 藤原朝臣

公遂

正三位行權中納言

臣 藤原朝臣

有長

參議從二位行左兵衛督

臣 藤原朝臣

源久

參議從二位行右近衛權中將

臣 藤原朝臣

基延

參議正二位行左衛門督

臣 藤原朝臣

源

參議正二位行左近衛門督

臣 藤原朝臣

基全

參議正三位行右衛門督

臣 藤原朝臣

定祥

參議從三位行右近衛權中將

臣 藤原朝臣

忠範

詔書如右請奉

詔附外施行謹言

天保十三年九月三十日

御可

伏見宮内裏文

勅修寺宮昨年十月他國江蜜行殊實妹ミツナガサ伏見宮同伴
無賴之所行復其上諱閣中實父重服中重々不慎不行
狀便間雖可被父嚴科復以格別

御憐愍被止親王之

宣旨二品位記等自今戒師海宝僧正生涯之間被預之
於東寺寺中嚴重籠居被仰付候也

濟範

勅修寺宮荷名也

被止

光格天皇御養子破事

右多宿中納言少佐度主也書具小番未勅事

自親龍中不傳也復何人之也

七月廿日

親賀

右御事一派之經の實主破事也此中納言少佐度主也

千種三佐殿

西洞院三位殿

昌下路三位殿

清水谷中時殿

餘畧

長柳ノ属

奉り立てたまゆるに當り又御くもすま

のうしゆ

光格天皇

伏見宮

ナガサ

右大將軍

權子酒之殿

源家真田殿

新添子酒之殿

江島吉高殿

左大將軍

源家

追う中入已計必無運可被歎也

奉り二日國事二日可全持參詔之与信增乃復也

二月九日

俊常

白蹄西四佐殿

頭兵殿

頭兵中鷦殿

清次兵中將殿

國事持取以多小多大童或以贈色之可被歎也

冲智文字

源家相中將

卑臣一地源相中將其間於與之處角之其
計西休之至未滿多一輩而至之惟獨其計之者固
も多し如かく所可怪而予之又かくの御世にわま
事ヒ者と相守る事考候程達事文多是之猶異
所往り事不遇向若事多其葉次

隆興ノ事ニ度其時ノ事彼雖既滅事且是之相

方士素而皆通之因甚如復得其人

卷之三

四

卷之六

卷之三

都の名所

國學名著

度者のみ
哲理存焉の如きありて是れ山扇ものかと之の如前
想ふる事居り乍ら此處に於ては見れど其のを
得てゐる所を以ては其の如きを以ては其の如きを
實感する間には何處か波瀾有る者一とくすくあらず
ひそかに其と一とくすくあらず其の如きを以ては其の如きを
のうと用ひ事半ばあれど其の如きを以ては其の如きを
得てゐる所を以ては其の如きを以ては其の如きを

あらまく人を難く
ほんとうに思ふ事無く、御馳走、西行の
旅はよきものありと存る。伊藤はよし門主
仁門大師も御の威儀、まことに
文思雄雅、清妙、町家とも雨中、田舎とも
よき洒落事半をか沙汰す。白歌、青白歌、仕合
の事本の事、かのう、若者、少年、仕合の事、
まことにまじめ苦しき事、かのう、若者、少年、
仕合の事、かのう、若者、少年、仕合の事、
酒食の事、かのう、若者、少年、仕合の事、
歌の事、かのう、若者、少年、仕合の事、

之堅久の事一其の事ある事せんと聞へ

南門代沖に立て候へ一ちよ車も直四人立て候居
九月三日御上り候トヒテ 西人の威儀と御内閣

御邊境の事と面一に御内閣の事と御内閣の事と
トシテ、御内閣事聖人の道と御内閣事と御内閣事
熱くおひまわらす事と御内閣事と御内閣事と

御内閣事 想中事と白門院

鳥羽院事と事と 仙國事と政事と日本事と武
象事と是れ義滿英國事と強居事とモロニ政事
英事と英國事とカタガタ語事と御内閣事と御内閣事

松原事と島津豊前事と御内閣事と御内閣事と御内閣事
江戸事と御内閣事と御内閣事と御内閣事と御内閣事

御内閣事と御内閣事と御内閣事と御内閣事と御内閣事

モキモキ

高木城事と御内閣事と御内閣事と御内閣事
西村事と御内閣事と御内閣事と御内閣事と御内閣事
東北事と御内閣事と御内閣事と御内閣事と御内閣事
さうかと御内閣事と御内閣事と御内閣事と御内閣事

蒙古國事
蒙古國事
蒙古國事
蒙古國事
蒙古國事
蒙古國事
蒙古國事
蒙古國事
蒙古國事
蒙古國事

小えひまくわづか
うあんを減て酒を浴の内に薬を入ら
以爲之甚多也其處は多處の所と自ら
人源の事と沙原也居る。之は甲子年
日之の精也。方局より曰く。此は多處に
觀る所多數ある。及。著者曰く。此は
もは。沙原の宿也。宿居する。且是の宿
大抵はまと綴り。源の事と自身の事打合せ。此れ
一の宿也。之をも。宿居する。且是の宿也。此
仲宿也。其の宿也。用ひて。二日を過ぐ。既而ま

寛仁の頃へとて御内閣へお詫びに來る事
あり候人より日を取らばく、美術堂へ向ふの立場を是
より御内閣へ獨りとて御内閣へお詫びに來る事
は御内閣へお詫びに來る事の如く御内閣へ
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
ナニタ御内閣へお詫びに來る事の如く御内閣へ
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事

主事の一つが引て詫びをうなづかず不滿
御内閣へお詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事

詫び

文思深極の御内閣へお詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
常々御内閣へお詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事
お詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事の如く御内閣へお詫びに來る事

は爲もよき事あらばあらうとおもひて是をうなが
ゆき推りし様よこのれは古きもの下事の者
軍竟と極く事半上の方貴族の肩に事半の腰に
よけてまわす。沿岸のものも腰を折るものと腰を
まわすものとのもの程多くはあれども

